水辺環境の変遷からみた人間と自然との係わりに関する研究

A STUDY OF THE RELATION BETWEEN HUMAN AND NATURE FROM THE VIEWPOINT
OF THE WATERSIDE ENVIRONMENT'S TRANSITION

宇井 えりか*, 畔 柳 昭 雄**

Erika UI and Akio KUROYANAGI

The purpose of this study is to grasp how to change the relation human and nature from two points, "the state of the nature environment and the inhabitants", "the human's daily action" by listening at the waterside environment which had variously related to life. And it makes "the relation of human being and nature" and "the relation of life and nature" clear. As a result, the development changed concerning by the human and the nature. And it took things the important part that the nature accomplishes to the opportunity and sustain the community.

Keywords : waterside environment, listening, community, inhabitants, living environment

水辺環境、ヒアリング調査、コミュニティ、生息生物、生活環境

1. はじめに

近年、都市化の進展は人々の身近な生活環境から自然を遠ざけ、四季折々の季節感やその移り変わりを喪失させるとともに、生き物等との係わりも希薄なものにしてきた。特に、これまで自然との接触機会が比較的多く見られてきた都市近郊の農村漁村地域においても、海岸線の埋立てや河川の護岸改修が行われ、これに伴い人口の増加や宅地開発、周辺土地利用の改変などが進められることによって、こうした傾向が顕在化してきている。しかしながら、人間は潜在的に自然との接触を欲していることから¹⁾、身近な環境において緑や水といった自然環境を保全して行くことが求められてきている。

そのため、今日では埋立開発や護岸工事によって姿を大きく変貌させ、地域住民の日常的な生活環境から遊離した海岸線や河川などを、地域住民に親しまれる水辺環境として再生する動きが各地で高まってきている。そして、今後は自然的環境を積極的に創出することにより、生態系を保全・回復したり、自然と親しめる水辺環境の整備を展開し、地域住民の生活環境に配慮しようとする事業が求められてきている。

ただし、こうした整備は、人間活動の便益を前提に行われるものが多く、本来の水辺環境が保持していた「人間－自然－生活環境の係わり」を必ずしも再構築しようとするものではないと

図－1 研究概念

思われる。そのため、今後は「人間－自然の系」をなす水辺環境を構築することが重要であり、そのことが生活環境を本質的に豊かなものにすると思われる。

一方、地域環境の変遷とそこで展開される人間行動との相互の関係に関する研究は少なく、著者らによる都市河川の変遷からみた人間と水との係わりに関する研究²⁾の他、木下勇による児童の遊びを通してみた農村の自然の教育的機能の諸相に関する一連の研究^{3), 4)}及び土山肇らによる親水公園の利用状況と周辺住民のコミュニティ形成に与える影響に関する研究^{5), 6)}などいくつかの事例はあるが、今後この分野の研究の蓄積は重要と思われる。

* 都市基盤整備公団 工修
(元日本大学大学院)

** 日本大学理工学部海洋建築工学科 助教授・工博

Urban Development Corporation, M. Eng.

Assoc. Prof., Dept. of Oceanic Architecture and Engineering, College of Science and Technology, Nihon Univ., Dr. Eng.

2. 研究概念・目的

海や河川をはじめとした水辺は極めて脆弱な環境であり、わずかな周辺環境の改変によっても、その影響を被りやすい。そのため、海岸の埋立てや河川の護岸工事によって、水辺に形成されてきた生態系や生物相は破壊されやすい。一方、地域の海岸や河川は、地域住民の生活と深く関わっている場合が多いため、こうした場所や環境が消失し、生物が存在しなくなることは、地域住民の生活にとっても大きな痛手となる。特に漁業就業者にとって、生業の場としての海が失われるということは、そのまま仕事場をなくすことにもつながる。

そこで、本研究では、海岸線の埋立てなどにより地域の生活環境が都市化の影響を受けつつも、比較的自然の名残を残している東京湾沿岸の地域を取り上げ、水辺環境の変化に伴い、その地域で生活を営む人間がどのように自然と関わってきたかを、図-1に示す研究概念に従い、①過去から現代に至る地域の自然環境、生物生息状況の様相の把握。②地域住民の日常的な生活における行動の把握。この2点に視点を置くことで「人間-自然、生活-自然の係わり」を明らかにし、都市化に伴った自然の変化が人間生活にどのような影響を与えてきたかを捉え、生活空間に対する自然の意味を考究することを目的とする。なお、本研究では、自然及び自然環境は、人間の手によらず存在するあらゆる要素（生物、空気、水など）から構成され、かつ生態系が成り立つ環境のことを指し、主体を取り巻く環境については「自然環境」、人間と直接係わりを持つ自然環境を「自然」と定義する。

3. 研究方法

3-1 対象地の選定

本研究では、昭和元年以降の地域の自然や生活などを中心とした地域状況と、現在(平成11年)の状況を比較することで人間と自然との係わりを捉えるために、地域の自然環境条件を活用することによって成立する農業漁業を主体としてきた地域を対象とすることとした。そのため、地先の海岸線を埋立てることで工業地域を形成してきたり、宅地開発により人口増加が進行することで、地域構造が変貌しつつも、残された自然環境を使い農業や漁業が営まれている東京湾沿岸域の臨海部を対象とした。対象地域は、東京湾内で唯一河口に自然の干潟が残存している千葉県木更津市・袖ヶ浦市・君津市を流れる小櫃川(2級河川:県河川課管理距離77km)流域、及び河川改修により護岸整備が行われている神奈川県横浜市金沢区を流れる侍従川(2級河川:県河川課管理距離2km)流域を選定した。

3-2 調査概要

調査概要を表-1に示す。本研究では、住民を対象としてヒアリング調査を実施した。調査対象者は図-2に示す地域の中で、昭和元年当時から現在まで在住している古老及び地域の自然に関して知識を有する住民とし、関係団体や役所を通じて紹介を受けた。調査は、小櫃川流域では、埋立前の海岸線沿いや小櫃川水系の農業用水路、堰を中心とした止水域など水辺の近隣に居住している住民と小櫃川上流約60km程に居住している住民、及び、侍従川流域では、侍従川に沿うように点在して居住している住民に対して、それぞれ各地点1名にヒアリングを実施した。このため対象者数の少なさは個別面接により時間をかけ、質問を聞き取

表-1 調査概要

項目	調査概要
調査対象地	小櫃川流域(千葉県木更津市、袖ヶ浦市、君津市)、侍従川流域(神奈川県横浜市金沢区)
調査期間	1999年10月7日～11月16日
調査方法	ヒアリング調査
調査内容	遊び(8項目)、自然(5項目)、地域(4項目)、生活(7項目)、手伝い(2項目)
調査対象者	海や川などの水辺空間を有する地域に居住している古老、及びその地域の自然に関しての知識を有する14名

図-2 ヒアリング対象者の概要(点線は昭和初期当時の海岸線)

るとともに、それぞれの対象者の話しの内容を相互に判断することで、整合性を確認し補うこととした。また、地域の開発等については、関連する文献資料や史料及び、統計資料に基づき補足調査することとした。ヒアリング内容は表-1に示す調査内容についてそれぞれ聞き取り、テープレコーダーに収録した。この方法は関係研究論文等^{4)・7)}を参考にし、用いることとした。これは語り手の話し言葉を収録することで、本人の自然との係わりを語りの文脈の中から生活風景や行為を通して捉えることができるとともに、当時の自然の姿を見い出せると考えたためであり、後日、質問項目毎にヒアリング内容を分類した。

4. 結果

4-1 生物状況の変化

各地域の生物の生息状況についてヒアリングするとともに、地域の開発状況に対しても合わせてヒアリングした。その結果に基づき、地区ごとに分類整理したものを図-3、4に示す。なお、小櫃川流域については、ヒアリング対象者の居住範囲が広いと、上流域と下流域に分け、さらに下流域については、水との係わり方の形態が多様であるため、生活に密接に係わっている用水路、堰を中心とした止水域、干潟を含んだ海岸や河口域の3種の水域形態に分けることとした。

a. 小櫃川流域(木更津・袖ヶ浦・君津地区)

ヒアリング結果から、昭和元年頃の小櫃川上流域の生物相は比較的豊かで多様な種類の生存できる自然環境が存在していたことが分かる。しかし、昭和50年前後に行われた川まわし^{注1)}の実施を伴った河川整備による水辺環境の改変とほぼ同じ時期に水生生物が減少してきている。中でも泥底に棲むウナギ、ドジョウの底生生物や、止水域に生息するタナゴ、メダカ及び、淵、瀬、うろ^{注2)}に棲むハヤの激減が指摘されており、これらの魚類の減少は、河川整備による底質変化と河道の直線化などの影響により、生息場(餌場、棲み家)が消失したためと思われる。また、冷水性のヤマメ、ヤツメウナギも減少していることから、河川整備が川の水温にも影響したものと考えられる。さらに、上流域では山林に生育する植物の減少についても指摘されている。

一方、小櫃川下流域では、海岸線が埋立てられ、工業地帯が建設された昭和40年代頃に、タナゴ、カレイ、オコゼ、ハゼ、クルマエビ、イシガニなどの干潟を含む砂泥底に生息する魚類、甲殻類が減少している。このことは、埋立てによって干潟が消失し、底質が変化した結果、生息条件の適応できない生物が減少したも

のと思われる。さらに、同時期にモズ、ホオジロ、オナガ、ムクドリなどの農耕地に生息する鳥類が減少したことは、鳥の生息場所であった農耕地にも開発が進んだものと思われる。しかし、地域によってはホオジロやメジロなどの田園集落や周辺樹林に生息する鳥は生息しており、これらの鳥は民家の庭木などで採餌する

		昭和 元年(1926年)						平成 元年(1989年)	
		10	20	30	40	50	60	11	
上流域 (A・B地点)	生物	魚介類 (甲殻類を含む)	ヤマベ(冷)、ハヤ(瀬・瀬・石)、タナゴ(止・岩)、ヤツメウナギ(冷)						
			アユ(瀬・瀬)						
			ウグイ(瀬)、エビ、オイカワ(砂泥・泥・瀬・瀬・瀬)フナ(止・瀬)						
			ウナギ(瀬)、ドジョウ(泥)、メダカ(止)、マルタバヤ						
		鳥類	アワチドリ(山)						
			スズメ(田)						
		昆虫類 (水生生物を含む)	アブラゼミ(枯)、ツクツクホウシ(雑)、ホタル、ミシミンゼミ(山)、アオガエル						
			カブトムシ(樹)						
		草本類	オナガミズアオ、ダルマガエル						
			柿(山)、ドクダミ(林・湿)、コナラ(雑)、アズマナザサ、クリ(山)、ジャノヒゲ(林)、セリ(田・湿・河・水)、ドクウツギ(草・田・河)、フキ(山・湿)、フジ(山)、マダケ(林)						
			ウラシマソウ(林)						
下流域	生物	魚介類 (甲殻類を含む)	フナ(止・瀬)、ナマズ(泥・砂・岩・水草)、ウナギ(瀬)、コイ(瀬)、ドジョウ(泥)、タナゴ(止・岩・水)、カレイ(砂)、クルマエビ(砂)、オコゼ(砂)、ハゼ(砂・瀬)、アイナメ(岩)						
			アカエイ(砂)、イシガニ(砂・瀬・岩)、オコゼ(砂)、ダス						
			モクズガニ、						
			アオバズウ、ウグイス、カワセミ						
		鳥類	キジ(農)、ゴジュツケイ、モズ(農)、トラツグミ、ツグミ、ホオジロ(農・田)、アオジ、メジロ(田)						
			カラス(農)						
		昆虫類	アオジ、オナガ(農)、セキレイ、ヒヨドリ(田)、ふくろう、ムクドリ(田・農)						
			クツムシ(草)、ホント、ギンヤンマ(止)						
		草本類	マダケ(林)、モウソウダケ(日)、フジ(山)、アケビ(谷)、ワラビ(草)、ウド(草)、ゼンマイ(雑)、野バラ(低・山)、ヤツチ(林・海)、栗(山)、杉(乾)、ヤマモ(林)アケビ(谷)、オミナエシ(草)、ジネンジョ						
			キキョウ(草)、栗(山)、ケヤキ(溪)、杉(乾)、フジ(山)、フジバカマ(草・湿)、マダケ(林)、ムク(溪・海)、モウソウダケ(日)、ヤマブドウ(林・山)、ワラビ(草)						
			シュロ(林)、カヤ(山)						
河口域 (G地点)	生物	魚介類 (甲殻類を含む)	アサリ(砂)、ハマグリ(砂)、ツツレサセコウロギ(草・底)						
			カレイ(砂)、イシガニ(砂・河)、ワタリガニ						
			カワヨシノボリ(石・瀬・瀬)、トオヨシノボリ(淡水・ハゼ)						
			オオクチバス(水草)、ブルーギル						
		鳥類	ミヤコタナゴ、ゼニタナゴ(泥・砂)、タナゴ(止・岩・水草)、ギバチ(石)、ナマズ(岩・水草・砂泥・泥)、テナガエビ						
			キジ						
		昆虫類 (水生生物を含む)	モンキアゲハ(山)						
			オオムラサキ(雑)、ミドリシジミ(雑)、アカシジミ(樹)、トウキョウダルマガエル						
		草本類	ツツレサセコウロギ(草・底)						
			ギンヤンマ(止)						
			埋め立て						
下流域	生物	魚介類 (甲殻類を含む)	ウナギ(瀬)、スズキ(瀬)、コイ(瀬)、ナマズ(砂・砂泥・岩・水草)、ハゼ(砂・瀬)、ザリガニ、アサリ(砂)、クロベンケイガニ、カレイ(砂)、ニカブナ						
			テナガエビ、シラウオ(瀬)						
			イシガニ、ハマグリ(砂)、ナヤコ、イワシ、ヤマドロガニ、スナガニ(砂・底)						
			スズメ(田)、メジロ(田)						
		鳥類	アマモ						
			埋立地に工場進出						
		草本類	排水垂れ流し						

冷:冷水性、瀬:瀬、瀬:平瀬・浅瀬、う:うろ、石:石下、浅:浅所、泥:泥底、砂:砂底(干潟含)、止:止水域、岩:岩礁域・岩場、湿:湿地帯、瀬:瀬場、水草:水草、草:草原、山:山地、林:林、湿:湿地・日陰地、河:河原・河床、水:水辺、溪:溪谷沿い、海:沿岸域・海岸、乾:乾潟・干潟、日:日当たりのいい場所、底:底、荒:荒地、雑:雑木林、田:田畑、農:農耕地、庭:庭木、低:低木、樹:樹木、池:池沼

網かけ部分は埋め立てなどによる地形改変が進んだ時期

→:生物の生息時期

-->:生物の減少時期

図-3 生物生息状況の変化(小櫃川流域)

図-4 生物生息状況の変化(侍従川流域)

ことで、生息環境の変化に適応しているものと考えられる。

また、農業用水路を有する地域(C・D地点)では、埋立てとほぼ同時期に排水を水路に流したことによって、それまで生息していたシラウオやテナガエビが見られなくなったことが指摘された。これらの種は一般的に環境の質の低下により激減している生物であり、この地域でも昭和40年代に環境変化の影響を大きく受けたことが分かる。一方、止水域を有する地域(E・F地点)では近年、オオクチバス、ブルーギルといった帰化魚種が人為的に放流され、増加したことにより、他魚種の減少を促したことが指摘された。また、草原や農耕地などの開けた場所を好むキジの増加も指摘されたが、こちらは埋立てや山地の開拓、宅地化が進行した影響を受けたものと思われる。

b. 侍従川流域(金沢地区)

金沢地区を流れる侍従川の流域では、昭和16年頃から進行した農業の衰退により、田畑が減少し、昭和20年代に入り農耕地を中心に生息するモズ、ホオジロといった鳥類や、農業用水の止水域などに生息するギンヤンマなどの昆虫類が減少している。そして、昭和30年代から40年代にかけて山地、雑木林、草原、止水域などに生息、生育するゲンゴロウ、ミズスマシ、クワガタなどの昆虫類やナガイモ、ワラビなどが減少したと指摘しており、田畑に引き続き山林にも開発が進行したものと思われる。また、河川の護岸をコンクリート化した時期に、淵や瀬、うろ、石などに生息するハヤの姿が見られなくなったと回答していることから、侍従川の河道の単純化が、魚類の生息場(餌場、棲み家)を消失したものと思われる。しかし、この地域では平成(1989年)

に入り、次第に水質環境が改善されたことに伴い、鳥類を中心に生物が再び増加してきていることも指摘された。

このように、開発や整備によって農地や山林が減少し、鳥類の生息場、植物の生育場が失われてきたことが分かった。また、利水・治水目的によって改修された河川において、生物相に対する環境が大きく変化したことにより、魚類の生息環境が失われたものと思われる。こうした開発の時期と生物の減少はほぼ同時期に起き、また一方では、新たな生物が生息していることから、人間の活動範囲が拡大するに従って、人間を取り巻く自然が大きく変化していることが分かる。

4-2 人間行動の変化

ヒアリング調査に基づき、各対象地における日常生活の中での人間と周辺環境との係わり方を示したものが図-5(a)、6(a)である。これより人間と自然、人間と人間との係わりについて、各地域ごとに示していく。また、併せて、調査対象者としての語り手の語りの文脈を抜粋して示す。

(1) 人間と自然との係わり

a. 小櫃川流域(木更津・袖ヶ浦・君津地区)

この地域では、従来は大半が半農半漁によって生活を営んでおり、常に地域の自然に依存した生活と就業の場が密接した生活形態をとってきた。そのため生業だけでなく、道普請^{注3)}の材料に貝が使われたり、洗濯、野菜洗い、資材の洗浄などを川で行ったり、日常生活を維持するための手段として身近な自然が用いられていた。

『道普請だなんだって、みんな青年でやったですよ。あの道路をね。当時、今みたいでないから、土ですから。だから掘れたりなんかしちゃって、もちろん自動車なんかないけど、馬車みたいなのがね。だからあるんですよ、春になると。ジャボ、ジャボって言ってね、波打ち際に寄せられた貝を捕って、それを牛車で運んで、それを播く。』(D地点、男性、68歳、農家)

『水の不足なうちはね、川を使用して洗濯したり野菜洗ったりさ、ほとんど井戸はあったけど、また、川行ってこんな大きな物はね。今は夏になると今の人達はね、

布団皮なんか洗う人、うちなんか、うちはつかないよ。夏になると全部布団の洗い張りをやったんだからね。』

(A地点、女性、83歳、主婦)

『春になってね海苔をやったでしょ、その海苔のすく簾を洗ったですね。それはもう川じゃないと大量の水を使うから、今と違って水道がないから。そこで洗ったですよ。』(D地区、男性、68歳、農家)

このように生活を営むための手段や材料として、自然の構成要素を活用しており、生活の中で自然が欠かせない存在となっていたことが分かる。そして、常に自然と共存してきた生活形態であったため、地域内の自然との係わり意識が高く、自然を維持するために、実の取り方、燃し木を取る場所、水を大切にするといった

規範意識が日頃から地域住民の間に広く浸透しており、その行為は遊びや農作業の手伝いの中で子供にも伝えられており、地域住民の間に定着していた。

『ただ、みんなそれぞれ節度を持ってやってたんじゃないかな?例えば、めいっばい取っちゃうとか絶対なかったね。(中略)だって、食べるだけ取ってくればいいんだからね。その辺は割と、みんな普通律っていうか、マダギの生活のせいだと思うんだけど、残してるんだよね、ちゃんと、だから、自分がその日に暮らせる分だけ、あるいは、たとえば商売してる人は、何日か暮らせるだけ、以上は取らなかったね。』

(G地点、男性、72歳、教員)

『みんなね親が百姓やってたから、水っていうのをみんなね、山から水を絞れて(絞り出して)くる水とかね、そういうどういふ小さな水路でもね。だから俺らそういう教育受けてたから、水は大事にしるって言うから、山の中のちよろよろ清水が流れているよね、あれに木が倒れて止めたりしてさ、ガキどもが遊びにいけばそういうのを見つければ、それ全部取ってたの。もうそれは小さい頃から言われたよね。(中略)かまどの木を取るところが、付き合ひがある山しか取っちゃいけないとかね。だから、すぐそこにあるんだけど、わざと遠くまで行かなくちゃいけないとか。』(C地点、男性、40歳、一)

このように地域住民が生活を維持するために、資源となる自然に対して規範意識が生じることは、自然を維持するだけでなく、資源を共有している地域の人間同士の関係を円滑に促すことにもつながっていたものと思われる。また、人間と自然との係わりは必ずしも生業目的だけでなく、子供達を中心とした遊びの中でも大いにみられた。魚釣りや、鳥の捕獲などは遊びと生業の要素を兼ね備えた行為であり、より確実に捕獲するために生物の生態や行動に関する知識を子供の頃から豊富に得ており、山で木を伐採した後に生える植物や、どこにどのような花が咲くのかといった知識を主に遊びの中から会得しており、大人になる頃には専門家以上の知識を有することもあった。

『同じ畑の中でも餌食べる場所って決まってるから、他にわなをかけてもかからないわけよ。だからものすごい観察力よ、子供らが。だからあの動きしたらあれは餌食べる時とか、そういうのみんな知ってるわけ。』(C地点、男性、40歳、一)

図-5 人間と周辺環境 (小櫃川流域)

『学校に登校する時だって、みんな山から行きましたからね、「おっ、リスいたっ」なんてね。で、分かるんですよ。あの、巣作ののね、まわりはもう、木の小枝なんかで、中には杉の皮をみんな入れるんですよ、リスは。だから、杉の皮がむけてるわけ、彼らむくから。うちのここにもたくさんありましたからね。取るんですよ、引っかいて。』(D地点、男性、68歳、農家)

『だから子供の時分になんかね、山なんかって春になればあれでしょ、ワラビ取りに行ったりね、秋になればキノコ取りとかね、結構行っただですよ。(中略) 子供が知ってますからね、普段が普段だから。ここはね、ほとんど山ってのがね、もう植林はしましたけど、こういう柱になるのはめったになくなって、ほとんどが松でね20年から25、26年経つとね、新ミズって言ってそれやって、それをみんな切ってしまうとその後にはたくさん生えるわけ。だから分かるんですよ。』(D地点、男性、68歳、農家)

このように子供の頃から自然を相

手に遊び、生活していたため、生活の中で自然との共存が定着していたことがうかがえる。そして、遊び仲間と自然資源を共有して遊んでいたことから、前述したように自然に対する維持・保全意識が規範意識として身に付いていたものと思われる。しかし現在では、これまで容易にアクセスできた海岸などの水辺に近づけなくなったことや、環境の変化に伴った生物の減少といった理由から、水辺に係わる行為が減少した。また、生業的係わりが減少することで、生活の中に占める自然の役割が薄れ、人間と自然との係わりが希薄になったものと考えられる。その結果、今まで生業の場でもあった水辺における自然の消失は、人々に日常生活などにおいて寂しさなどを感じさせているが、人々は開発による環境変化に応じた生活形態へと徐々に移行していた。

b. 侍従川流域(金沢地区)

この地域では、ノリ漁や塩づくりが盛んに行われていた時代もあったが、その後、昭和初期に軍事施設が建設されたことにより人口が増加し、地域の大半が1次産業から2次、3次産業就業者に移行して、生活と就業場が遊離した生活形態となった。そして、人間と自然との係わり方や係わる目的が以前と大きく変化した。

『蝶も何種類か来たんですよ。それもとてもしつていうのをすごく、家の中にも感じられる。(この地域は) そういうところですよ。』(F地点、男性72歳、教員)

『結構ね、だから川で遊ぶっていうのもあったけど、大人も結構来たよ。魚を捕りに来たよ。もうね、ウナギなんか引っ掛けてくるんだもん、いっぱい。』(C地点、男性、67歳、会社員)

このように、この地域では魚釣り、遊び場、遊び道具、四季を味わう遊行的対象として、自然と係わるようになった。一方、同地域においても、このような係わり方に加えて一部の農業従業者は、遊行的対象として個人単位で自然と係わるだけでなく、生活の場として地域単位で自然と係わっていたことも指摘された。

『田んぼっていうのは上から水が来れば、上から順々に植えて行かないと、下に植えるって言ったって、(上の人が) 植えないと下の人が乾いちゃうでしょ。だからそう

図-6 人間と周辺環境 (侍従川流域)

いうふうにみんな共同作業だったわけ。』(G地点、男性、75歳、農家)

このように農業従事者などの間では、小櫃川流域同様、共同で農作業や農業用水の管理を行い、自分達の生活を維持するために、その糧となる自然に対して常に手入を行っていた。また昭和30年代以降、大幅に環境が悪化すると、生活と直接係わりのない余暇的活動は減少し、人間と水辺との係わりが希薄になった。その後、地域の水辺の再生により、生物の生息する環境が創出されたことが、人々を再び水辺に接するきっかけとなった。

以上のように、小櫃川流域では地域住民が共通した生活形態を営むことで、地域の自然を共通の資源(共有財産)として位置付け、維持していた。また、遊びなどの余暇活動においても自然との係わりがあり、自然に関する豊富な知識を会得していた。一方、侍従川流域では生活形態が多様化することで、人間と自然との係わり方も異なり、川や山が遊び場または生業の場として、それぞれ個別に利用されるようになっていた。また、自然の消失が人間と自然の係わりを希薄にし、環境の変化により人間の行動が規制されることは両地域に共通して指摘された。

(2) 人間と人間との係わり

a. 小櫃川流域(木更津・袖ヶ浦・君津地区)

生活の中での自然との係わり方が類似した生活形態を営むこの地域では、環境を維持するための道普請、どぶさらい⁴⁾、海岸清掃などの共同作業や海や天気などの生業に関する話題を介した係わりが多くみられた。そしてそれらは、生業や生活のために地域住民が共有する海岸、川端、井戸、河岸などの場で日常的に行われていた。

『例えばどぶさらい、今日は海岸清掃とか。ほとんど漁業組合だから、あと田んぼもほとんどの人がやっていたから、暇払い⁵⁾って言うんですけど、暇をきれいにするのとか、あとは仕事関係ですかね。』(F地点、男性、40歳、漁師)

『川ざらいやったり、道普請。川ざらい⁶⁾って、川をね、要は田んぼとかね、水供給源だから、大事にするわけ、水路とかさ。もう百姓やっていようが、やっていない

が、夫婦全員出ていって、川を掃除する。土手の境とか、川の中のゴミとか水流れると、上流からゴミが流れて来るしね、で、そういうの引っかかっているのを掃除したり。農業用水路の掃除とかね。』(C地点、男性、40歳、－)

『まずあいさつしなきゃだもんな。あいさつは天気だから、いいやんべってね。天気のあいさつから始まるから。これは昔の風習から来てるんでしょうね。昔、ノリの養殖をやった時は、集まればその話が毎日のようにどっかに、ここに行けばみんないるみたいな感じで、毎日やっていたんだけど、やめちゃって、近所で二人三人になつてきたから、もうなくなっちゃったよね。(中略)川端って言って、船が置いてあるんですよ。そこにだいたい人がいて、いつも風を見ながら、みんな今日は(船の)出があるとか、時化とか、…』(F地点、男性、40歳、漁師)

『仮に町内で寄っても、すぐ海の話でしょうよ。アサリは採れるのか、ノリは採れるのかって、こうでしょ。ああ、海の話ばかり。寄れば海の話ばかりだよ。』(E地点、男性、65歳、金物店経営)

このように、日常生活の中で共同作業を行ったり一つの場合を共有する事で連帯意識を生じさせ、より地域のつながりを深めていたものと思われる。また、日常から地域全体で共有するものが多いことから、一部では集落全体で一つの宗教を信仰したり、念仏講や小安講などの講事を定期的に行っていたこともあった。

『それは昔からね、念仏講と子安講があったんですよ。念仏講っていうのは年寄りね。お堂に行って月1回ね、今2回かな。今でもやってますよ。あとはね、今は子安講もばあちゃんになっちゃったんですけど、子安講っていうのがあって、これもやっぱり、みんな集会場に寄ったり、その前は家回りなんですよ。集会場なんかがない時はね。今月はどこそこの家というようにね、みんなやりましたよ。(中略)昔一家のおやじどもはね「ようかつ講」っていうのがあったですよ。これ出羽三山信仰から来てるんです。どこにもあると思うんですけどね、やっぱり家回りです。地域全部がね。』(D地点、男性、68歳、農家)

このように生業を介した係わりがコミュニティ形成の要因となり、地域内に相互扶助の意識を生じさせ、信仰までも共有する連帯感を有していた。そして、生業に係わりのない物の貸し借り、冠婚葬祭の援助、縁台での交流、お裾分け、青年団の活動などが日常的に行われていた。

『魚が捕れたから、カレイが捕れたからカレイ食わないかって隣に持っていったりね。ノリができれば、今ノリをやっている人が100戸くらいしかないけど、私らがやってる時は800くらいいたんだけど、今は100くらいしかない。それでも、知り合いの人なんかには、ノリを採ってない人には、新ノリができたから食べてってねやってるよ。』(E地点、男性、65歳、金物店経営)

『だから皆は1軒の家でも、もし例えば(農作業が)遅れると、みんなが手伝ったりなんかして、やっぱり大切にしました。なんかにつけてね、冠婚葬祭もちろん。みんなやりましたよ。(中略)まあ、そうですよ。地域意識が強かった。』(D地点、男性、68歳、農家)

以上のように、この地域では生業のような地域で協力して行う作業を通して、地域の連帯意識が生じ、その意識が生業以外の日常の生活まで拡大することで、地域内のコミュニティを定着させていたことが分かる。

b. 侍従川流域(金沢地区)

侍従川流域における日常の人々の係わりは、井戸をはじめとして、銭湯、商店街、路地、御用聞きなどを中心にみられる。これらは自然に依存しない地域の生活形態において、日常生活圏が重複し、類似した行動パターンが人々の係わりの場を生みだしているものと考えられる。

『買い物するお母さん達の行動範囲が狭かったんですよ。買い物かごぶら下げてだいたいここにみんな集まってきたんですよ。』(A地点、男性、53歳、写真店経営)

『たくさんスーパーがあったり何があったりとかじゃないので、いわゆる米屋さんとかそういうのがあって、そういうのが御用聞きに来るんですよ。昔からの付き合いがそういう意味では、生活の変わらないところだね。(中略)その人だって昔14、15(歳)から来てるのが今は70(歳)過ぎくらいになってますからね。だから昔の話はたまにはどここのおばさんが怖くて叱られたとかね、意外と言ってましてね、結構おもしろいですよそういう話を聞くと。』(D地点、男性、63歳、会社員)

『(銭湯に行った時に)友達とかね近所のおじさんの背中を流してやるとき、次の日には面倒見てくれるとかさ、帰りにはせんべい買ってくるとか、そういういい時代だった。』(E地点、男性、74歳、会社員)

このように自然との係わりが希薄な生活を営んでいる人々は、自然の存在しない日常生活の中で、地域住民が面識を持つことをきっかけとして、交流が図られていた。一方、農業などを営む人々の間では、以下に示すように共同で作業を行ったり、飲食を共にすることで交流を図り、地域の連帯意識を強化していた。

『夜でも昼中でも共同作業をすれば、「じゃ、夜一杯やろうじゃないか」とやって、子供も一緒にごちそうになったり、そういう関係がね特にそういう関係だね。』(G地点、男性、75歳、農家)

以上より、小櫃川流域では、生活の主体である生業をきっかけとした関係を中心として人々が係わり、地域内での連帯意識を高めていた。そして、行動だけでなく、信仰までも共にする集落もあり、地域に根付いたコミュニティが形成されていた。一方、侍従川流域では、生活形態の違いにより人々の係わり方も異なり、自然に依存した生活形態の中では、生業や地域の自然を介して交流が行われていたが、自然に係わることなく生活を営む人々においては、類似した日常行動範囲から、顔を合わせる機会が生じ、人々の交流の場からコミュニティが形成されてきていた。しかし、それはあくまでも銭湯や商店街などの人為的要素を介してのコミュニティであり、自然を介して成立したコミュニティに比べて、地域性の共有意識や連帯意識が希薄であったものと思われる。つまり、日常生活において自然的要素と係わることが、地域に根付いたコミュニティを形成する要因や場となり、コミュニティの成立後も、人間同士の係わりの中に自然的要素が介入することで、コミュニティを維持しているものと考えられる。

以上を踏まえ、「人間－自然－生活環境の係わり」を示したものが図－5(b)、6(b)である。小櫃川流域では人間の自然を維持する姿勢が、生活環境に共有物として資質を提供し、その結果コミュニティが形成されている。また、地域で共有する生活環境に対して、人間が地域意識を有することは、自然の維持へとつながり、結果的に人間の生活を営むための資源の確保につながっている。そして、地域が共有する生活環境と自然は重層化し、生活環境を形成している。一方、侍従川流域では、地域の生活環境の変化によって自然との一体的生活は徐々に変化してきており、自然に依存した生活を営んでいる一部の人間は自然を享受する代わりに、自然を保全しているが、多くの人間は自然を遊行的空間資源としてだけ利用するようになってきている。また共有する生活空間においてコミュニティが形成されているが、銭湯や商店街などの人為的環境であるため、地域性が欠如し、地域意識の希薄化が生じていると考えられる。このように、日常係わる生活環境が

自然と分離することは、従来行われていた「人間－自然－生活環境」の「系」の成立を阻害しているものと思われる。

4-3 環境と人間との係わりに関する考察

これまで生活における自然との係わり方が、コミュニティ形成に影響を与えることを述べてきた。そこで今後、都市部において環境創造を行う際に目指すべき「人間－自然－生活環境の係わり」について考察する。

今回、対象地として選定した侍従川流域においては、近年、市民団体を中心とした活動により水辺環境の再生が進められている。その結果、この地域では環境再生が地域におけるコミュニティの再生をも促している。そこで、この地域を参考にして人間と環境との係わりを示したものが図-7である。

これより、人間は当初、生物が存在する生活環境に対して興味を示す程度の受身的関心を持ち、それが、清掃などの積極的かつ能動的な係わりに変化し、生態系の維持保全に関心が向くものと思われる(個人主体)。そして、さらに会話や共通の価値観、関心事を通して係わる人間が増加し(近隣主体)、地域に定着することによって連帯意識を醸成し(地域主体)、より多くの人間が環境に対して地域意識を持つことでコミュニティが成立し、このことが結果的に自然の持続性を高めることにつながるものと考えられる。また、人間が自然を維持することにより、地域で共有する環境に機能的価値を与え、そのような価値を有する環境に人が集まることでより持続的なコミュニティが形成されてくるものと考えられる。その際、重要な点は、地域で共有する生活環境と自然が重層化していることであると考えられる。

5. まとめ

本研究では「人間－自然－生活環境との係わり」に着目し、自然が人間や生活環境に与える影響を捉えた。その結果、次のような点が明らかになった。

- ①人間が行ってきた開発により、生物の生息場が失われ、環境に適応できない生物は姿を消し、その結果、人間と自然の係わりが大きく後退したり、変化した。
- ②地域で共通の生活形態を有し、その生活の中で自然に係わることにより、地域の自然を共通の資源(共有財産)として位置づけ、日常的に維持・保全を行っていた。
- ③生活形態の違いにより、人間と自然との係わり方は異なり、自然の管理を行うのは自然と密接に係わる生活を営む人間が中心であった。
- ④日常生活において自然的要素と係わることが、地域に根付いたコミュニティ形成の要因や場となり、コミュニティ成立後も人間同士の係わりの中に自然的要素が介入することで、持続的なコミュニティが形成されていた。
- ⑤人間は共有する生活環境に基づき、コミュニティを形成する

図-7 人間と環境との係わりの考察

が、その環境に地域の自然が存在しないことは、地域性を欠如させ、地域意識の希薄化をもたらしていた。

近年、生活環境の質の向上が謳われ、オープンスペースの緑化や環境創造が進められている。しかし、生活環境の質を向上させるには、景観を豊かにするだけではなく、人間と自然が一つの「系」の中で共存し、人間と人間とのつながりを促すような環境を創造することが重要であると思われる。本研究では、そのような環境には人々の共有の場となるための要素が存在し、そのきっかけとして自然の果たす役割が大きいことを捉えた。今後、生活状況の質の向上を図るためには土地の環境資質を考慮し活用することや、地域性のある環境創造として単純化された生態系ではなく、多様性ある生態系を育成していくことが重要であると思われる。そしてそのことが、より地域性の高いコミュニティの「系」の創造につながり、生活環境の質の向上に寄与するものと考えられる。

◆補注

- 1) 川まわしとは、屈曲している川を整備によって直線化する行為。
- 2) うろとはほらあなになっている部分のことを呼ぶ。
- 3) 道路の凸凹を平らにするための整備であり、多くが住民主体で行われていた。
- 4) どぶざらいとは、どぶ掃除のこと。
- 5) 駆払いとは、駆にたまったゴミなどを除去する行為。
- 6) 川ざらいとは、川にたまっているゴミを除去する行為。

◆参考文献

- 1) 品田稔・立花直美他、「都市の人間環境」、共立出版、1987
- 2) 畔柳昭雄、渡辺秀俊、磯部久貴：都市河川の変遷からみた人と水との係わりに関する研究、第10回環境情報科学論文集(1996)、1996
- 3) 木下勇、都市との比較からみた農村の児童の自然との接触状況 児童の遊びを通してみた農村的自然の教育的機能の諸相に関する研究 その1、日本建築学会計画系論文報告集 第431号、P. 107~P. 118、1992年1月
- 4) 木下勇、三世代への聞き取りによる農村的自然の教育的機能とその変容 児童の遊びを通してみた農村的自然の教育的機能の諸相に関する研究 その2、日本建築学会計画系論文報告集 第450号、P. 83~P. 92、1993年8月
- 5) 上山肇他2名、親水公園の利用実態と評価に関する研究 東京都23区における親水公園の現状と利用状況、日本建築学会計画系論文集 第462号、P. 127~P. 135、1994年8月
- 6) 上山肇他2名、親水公園の周辺環境に関する研究 親水公園が周辺住民のコミュニティ形成に与える影響、日本建築学会計画系論文集 第465号、P. 105~P. 114、1994年11月
- 7) 仙田満、原風鈴によるあそび空間の特性に関する研究－大人の記憶しているあそび空間の調査研究－、日本建築学会論文報告集 322号、1982
- 8) 国勢調査：総務庁統計局、昭和25年－平成7年
- 9) 秋道智彌、「自然は誰のものか ～ commonsの悲劇を超えて～」より
- 10) 宇井えりか、水辺環境の変遷からみた人間と自然との係わりに関する研究、日本大学大学院修士学位論文 2000年3月

(2000年4月5日原稿受理、2000年10月12日採用決定)